生活・文化 10

中臣遺跡の古墳と木棺墓

（財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

写真１　５世紀後半の小型低方墳（79 次調査）

墓を発掘し調べることで、昔の人々の死をめぐる習俗や他界観に迫ることができます。それだけではありません。墓には大きなものや小さなものがあり、豪華なものや質素なものがあります。このようなバラエティーは、きっと葬られた人の社会的な身分や階級を反映していることでしょう。そう考えると、ある時代、ある地域での様々な墓のありようには、その社会の身分や階級の構成が分かりやすく示されていることになります。山科区の中臣遺跡を例にして、見てみましょう。

５世紀後半の中臣ムラでは、「小型低方墳」という小規模な古墳が作られていました。一辺 10 m程の正方形の墳丘に周溝をめぐらせたものです。埋葬部分と墳丘は削られてしまっていて不明ですが、周

写真２　６世紀前半の木棺墓（79 次調査）

写真３　６世紀末～７世紀初めの木棺墓（74 次調査）

溝の底からは５～６個の土器を納めた場所も見つかっています（写真１）。６世紀になると、小型低方墳は作られなくなり、代わって木棺墓が作られ始めます。これは、長さ２～３ｍ、幅１～1.5ｍ程の細長い穴に木製の棺を納めただけの簡単な構造の墓です。棺は朽ちて残っていませんが、墓の周囲に供えられていたり、葬儀に用いられた土器が穴の中に落ち込んだ状態で出土します（写真２・３）。木棺墓は７世紀の初め頃まで作られ続けますが、６世紀終わり頃から７世紀初め頃にかけては、木棺墓と並行して横穴式石室を埋葬部とする古墳も作られていました（写真４）。中臣十三塚古墳群です。このころ、中臣ムラでは、この２種類の墓制が行なわれていたようです。

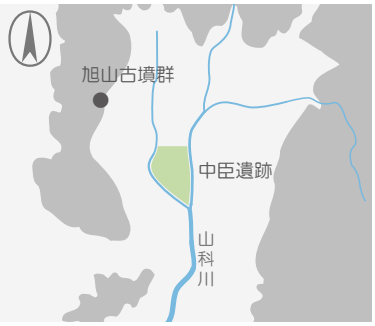
写真４　６世紀末～７世紀初めの横穴式石室古墳（70－2次調査）

これらの墓に葬られた人たちの社会的な身分を想像してみましょう。小型低方墳は、小規模でありながら墳丘と周溝を有する古墳なので、ムラの有力者の墓でしょう。しかし、これまでに11基も見つかっているので、ただ一人のムラの長の墓ではなく、ムラを構成するいくつかの家族の長（家長）の墓と考えたほうがよいでしょう。木棺墓はどうでしょうか。埋葬部だけからなるさらに簡単な墓であるので、より低い身分の人々の墓と考えたいところです。しかし、小型低方墳が消えると同時に現れること、それほど多く見つかっていないことから、これもやはり家長の墓でしょう。つまり、中臣ムラの家長は６世紀になると何らかの理由で、墓を簡素なものに変えていったのです。６世紀の終り頃には、横穴式石室を有する古墳が登場します。木棺墓を作り続けた家長の中から、数名の有力者が現れ、立派な古墳を作り始めたのです。家長の間に身分の上下がはっきりしてきたことが想像できます。

ところで、７世紀初め頃以降も中臣ムラは存続していますが、古墳や木棺墓は姿を消します。なぜでしょう。中臣遺跡の北西約2.5kmの東山丘陵上に、旭山古墳群があります（写真５）。この古墳群は中臣遺跡から古墳と木棺墓が姿を消す７世紀前半に出現します。ここでは、横穴式石室の古墳だけでなく、小規模で簡単な構造の墓が多数見つかっています。旭山古墳群は中臣ムラに住む様々な身分の人たちの新たな山上集合墓地だったのではないでしょうか。

（内田　好昭）

写真５　旭山古墳群　７世紀代の横穴式石室古墳や小石室、木棺墓が山上に密集する。



中臣遺跡と旭山古墳群の位置